

国際児童文学賞全集

U.S.A

15 アフリカ編 オーリアンネ賞受賞

コパー川の
かわがらす



国際児童文学賞全集15

〈オーリアンネ賞〉アメリカ編

コパー川のかわがらす

J・ジョージ原作 藤原英司訳

あかね書房

NVS

SEPTEN

TRIO



★国際児童文学賞全集⑮

★コパー川のかわがらす

★定価四八〇円



★一九六八年九月二〇日第二刷

★訳者Ⅱ藤原英司

★発行者Ⅱ岡本陸人

★本文印刷Ⅱ株式会社 文弘社

★オフセット印刷Ⅱ錦明印刷株式会社 明治印刷株式会社

★製本Ⅱ土開製本株式会社

★発行所Ⅱ株式会社 あかね書房

一〇一 東京都千代田区西神田三二一

★振替東京六四一五〇番

電話東京(二六三)〇六四一(代)

NDC 933

ジョージ, ジョン

コパー川のかわがらす

あかね書房 1968

261p 22cm (国際児童文学賞全集15)

内容; オーリアンネ賞 コパー川のかわがらす (J・ジョージ作 藤原英司訳)

著訳者との契約により校印なし



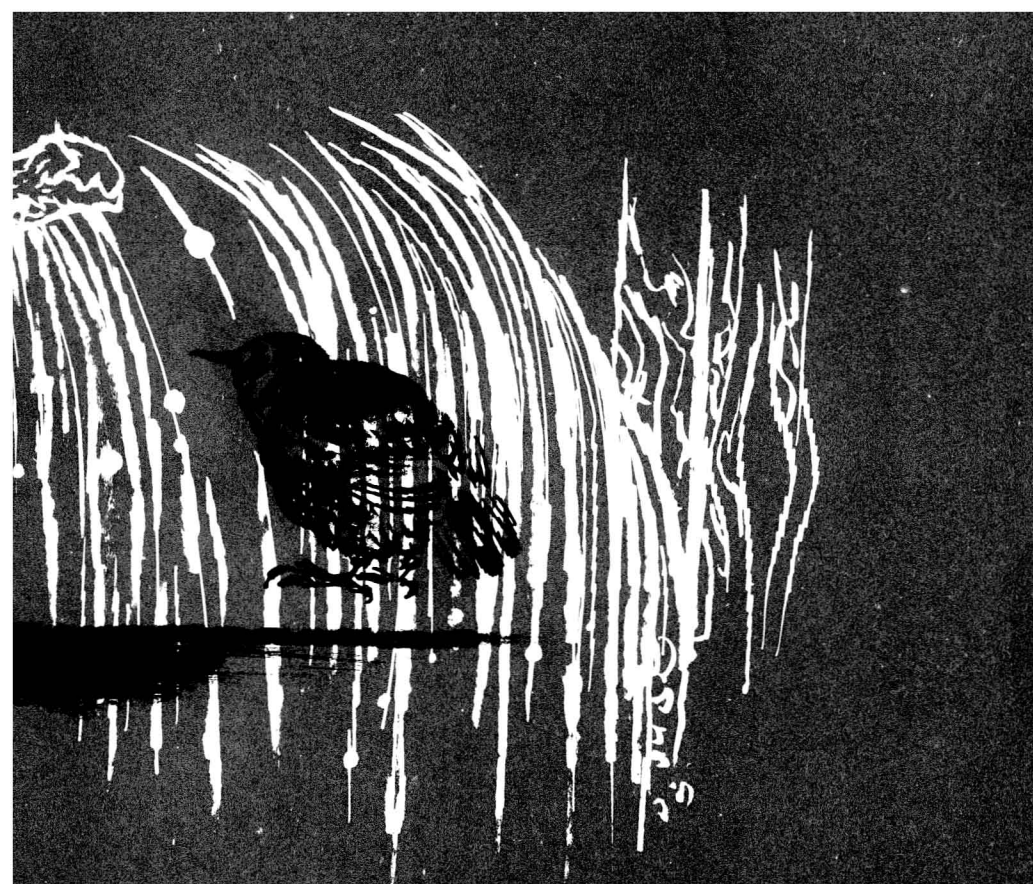
はじめに

ダグ少年は、夏休みに、ロッキーマウンテンに住んでいるおじいさんのところへ遊びにいきました。そして水のなかを歩くふしぎな鳥にあつたのです。

少年は、自然のなかでつよく生きぬいていくその鳥を観察しながら、自分も成長していきます。

鳥と少年が、おじいさんに見守られながら、どんなふうになつていったかを、この本から学んでください。

藤原英司



鳥のついで

1 金 6

2 カワガラス 28

3 山へきた少年 47

4 がけの上の巣 66

5 卵 81

6 こう水 102

7 夜あけ 113

8 森林地帯をぬけて 121

9 ひよこの誕生 130



10 流れをこえて……184

11 山くすれ……200

12 山くすれのあとで……209

13 川へかえす……224

14 巣立つ少年……231

15 わかれの儀式……241

あとがき 藤原英司……258

そつていし 沢田重隆(A・D) 沢田重(D)
まじえい 山田三郎

■ 著者紹介

ジョン・ジョージ (John George) 1939年ミシガン大学林学部自然保護科を卒業したのち大学院で動物学をおさめ、博士号を受ける。現在バツサー大学の動物学の先生。奥さんのジーン・ジョージがさしえをかき、夫妻組んで、本書のほかに、ミズクの話などの本をだしている。



■ 訳者紹介

藤原英司=1933年東京に生まれる。10年ほど貿易会社に勤務したのち、現在は動物文学のほん訳に専念。主な訳書に「野生のエルザ」「あざらしのサミー」「吠えろアンティス」「ローラ」「あらいぐまのラスカル」等がある。

DIPPER OF COPPER CREEK

by John George

Original English Language edition Published

by E. P. Dutton & Company, Inc., New York.

Copyright © 1965, by E. P. Dutton & Company, Inc., New York.

This book is published in Japan by AKANE-SHOBO, Tokyo.

arranged through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo.

Translated by Eizi Fuziwara.

JOHN GEORGE
DIPPER OF COPPER CREEK

J・ジョージ原作
藤原英司訳

コパー川のかわがらす



アメリカ編 〈オーリアンネ賞〉



1 金

コロラド州しゅうのロッキーマウンテンさんみやくを、三キロ半ほどのぼったところに、荒れはてたゴシックの町がある。いまその町は、灰色のおもくらしい雨雲におおわれていた。あたりにきこえる物音は、たまにフクロウが霧をきって飛ぶ羽音ばかりで、町の古びた小さな家なみは、いずれも雨雲にすっぽりおおわれていた。もう五月のすえだというのに、エルク連山の高みにある谷間は、まだ雪につつまれ、まるで大きな雪づくりのくぼみのように見えた。

しかし、六〇〇メートル下にあるクレステッドバットの町には、もう春がきていた。そこでは雪は消え、道ばたに咲いたさまざまの花が、春風にゆれていた。四〇〇メートル近辺の山の頂にも雪はなかった。そういう場所には日の光がまっすぐにあたるので、雪や氷はみんなとかされてしまっていた。しかし山やまの高みをとりにくく空気はつめたく、その空気が谷間へ流れこむので、谷間の雪は、毎年六月のはじめまで、とけないでこのころのだった。

五月の雨は高地の谷間の雪をとかすが、雨さえこなければ、そのころのゴシックの町は、まるで、クリスマスのように見えたかもしれない。町全体がひっそりと、雪のなかにしずまりかえっていた。

からである。

この荒^あれはてた雪の町に住^すんでいるのは、ビル・スミスという名の老人^{ろうじん}ただひとりだけだった。ビルは、むかしから金^{きん}をさがしている男だったが、冬^{ふゆ}になると、この町でただひとり、わなを見まわりながら、八か月という長いあいだ、だれにもあわないですごした。毎日毎日、老人^{ろうじん}の耳にきこえるものは、ものがなしい風のさけびと、寒^{さむ}さにつよいカナダカケスのなき声^{こゑ}だけだった。

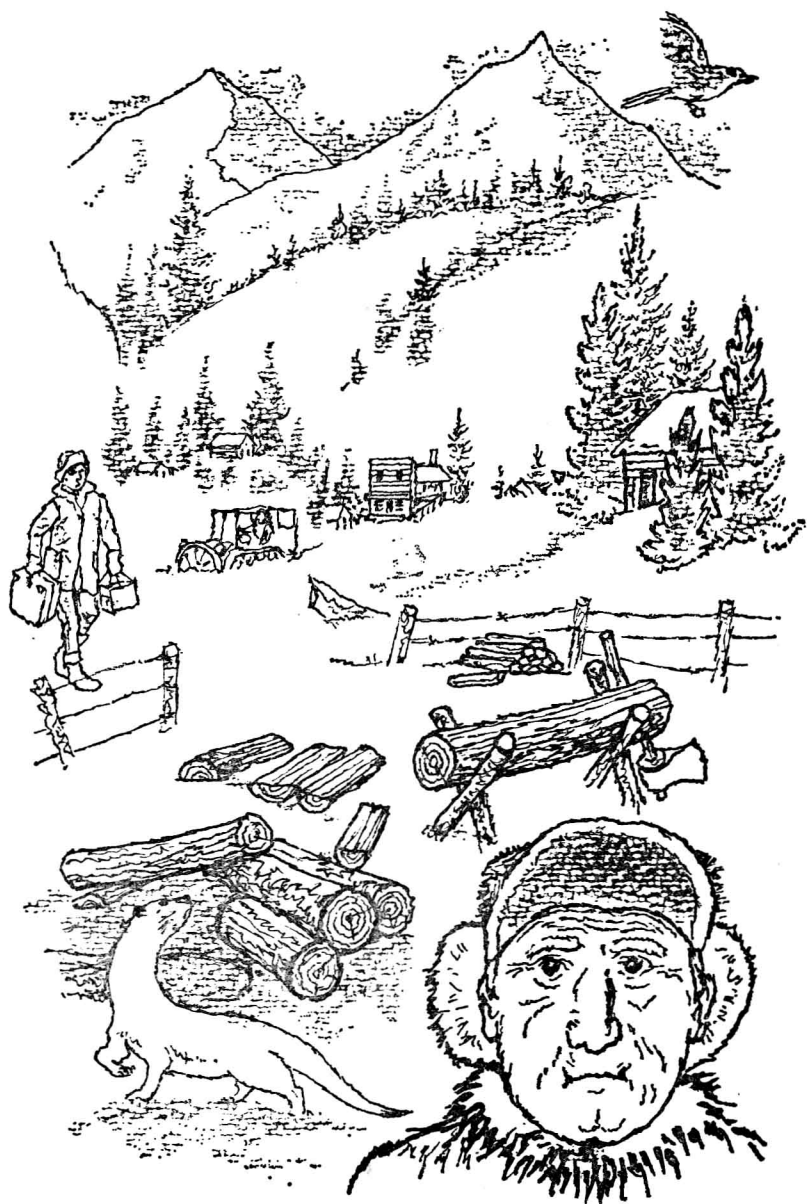
五月の雨がやってきて、そのはげしい吹き降り^ふが山をくだつてとおりすぎていくと、ビル老人^{ろうじん}はずきんのついた毛皮^{けがわ}のコートに手とおし、おのをとつて小屋^{こや}の外へでた。そして丸太^{まるた}を積^つんであるところへいっておのをふりかぶると、一撃^{げき}のもとに丸太^{まるた}を二つにたたきわった。それからおのを持^もったまま、谷間^{たにま}から吹きあげてくる風の音に耳をすました。谷間^{たにま}の雪^{ゆき}が消^きえていく音がきこえるようだ。クレステッドバットの町とゴシックの町は、いままでふかい雪にとざされていたが、その二つの町をむすぶ道が通^{とお}れるようになるのも、もうすぐのことだろう。

そうなると、除雪車^{じよせつしゃ}がダグ少年^{しょうねん}を山へ運^{はこ}んでくる。ダグは、ビルじいさんの孫^{まご}で、十代^{だい}の少年^{しょうねん}である。夏の休暇^{きゅうか}を山ですごすために、山の上のゴシックの町へくるのだ。ダグは力のつよい少年だった。ビルじいさんが鉱石^{こうせき}を掘^ほりだす山は、町からずっと上^あがっていった山の高みにあったが、ダグ少年は、その山から鉱石^{こうせき}を運びおろす手つだいを、ちゃんとやれるはずだった。

このゴシックの町で、いまでも鉱石^{こうせき}を掘^ほりつづけているのは、ビルじいさんだけである。南北戦争^{なんぼくせんそう}の

あとで、銀のねだんがあがったとき、この町には二千人ちかい人びとがあつまり、ゴシックの町は、ゆたかな鉱山町としてさかえた。そのころの町の人びとの自慢話は、この町へグラント將軍がたずねてきたということだった。グラントは北軍の將軍から大統領になった人である。しかし、そのご政府が銀をつかわないことにして、金をつかうようになると、ゴシック、ティンカップ、リードビルというような西部の鉱山町からは、どんどん人がいなくなり、町は、またたくまにさびれてしまった。銀のねだんがひどくさがってしまい、人びとはそういう町では、暮らしをたてていくことができなくなったのである。人びとはドアや窓をくぎづけにして、つぎつぎと町をさった。そして人氣のなくなった町の通りには、オオカミやハイイログマがうろつき、冬になると、毎年、いくつかの家が雪のためにおしつぶされた。そして、いまではゴシックの町には、わずかに六つの建物がのこっているだけだった。

去年の三月には、ジム・シャドソンが住んでいた家がついにつぶれた。ビルじいさんは家がつぶれたところへでかけていって、はりを切りとりながら、ジムのことを考えた。ジムは金持ちだったが、二、三年ほどまえに死んでしまった。ビルじいさんは、ジムのことを思いだすたびに、くやしがあった。ジム老人はラスラーけい（選谷に秘密の鉱脈を持っていた。ビルじいさんは、ジムが生きているうちに、こっそりあとをつけて、その鉱脈のありかを見つけておけばよかったと、いつもくやしく思った。ビルじいさんには、そのジムの秘密の鉱脈が、いい鉱脈だということがわかっていた。もっとも、じっさいにどのくらい、いい鉱石がつまっている鉱脈かということは、ビルじいさんにもわからなかった。し



かし、ジムが毎年、九袋か十袋の鉾石を運びだすだけで、冬はペプロの町へくだり、ぜいたくな暮らしをしてすごしていたのを見ていたので、たしかにいい鉾脈にちがいはなかった。

その秘密の鉾脈のことを考えると、ビルじいさんは、なにをやっている、おもわず手をとめて、アペリー山の頂を見つめるのだった。ビルじいさんの考えでは、ジムの秘密の鉾脈は、どうも、その山にありそうにおもえてしかたがなかったからである。

「ああ、ジムの鉾脈！」ビルじいさんは、いまでも、アペリー山のかがやく頂に目をあてながら、くやしそうに、ひとりごとをいいたした。「ジムのやつは、きっと小さな秘密の穴を大石でふさいでしまったんだろう。だから、わたしには見つかりっこない。あいつはいつもひとをはぐらかしていたな。あいつはいまでも、あの山にすわって大声でわらっているようだ。」

ビルじいさんは、そういつて山のほうへこぶしをふりあげながら、さらに、ひとりごとをいいつづけた。

「おまえは、ひとりひとりに鉾脈のありかをおしえるといつては、ひとりずつにちがう場所をおしえた。わしに地図をかいとてから、一週間ごとにおまえは死んだ！　だが、もしそんな地図をたよりに山へはいったら、わしは、二度と生きて帰れなかったかもしれない。わしは一度おまえに地図をかいとてやった。わしのウラニウム鉾脈へいく地図だ。あれはでたための地図だったが、おまえが、わしにかいてくれた地図は、あれいじょうにひどいものだった。わしは《死人の谷》へいく地図をおまえにか

いてやったが、おまえはあるとき、その地図をたよりに山へは行って、三日間も、ゆくへがわからなくなつたつけ。さまあみろ、だ。わしはあるときほど、胸がすつとしたことはなかつたぞ。」

ビルじいさんはそういうと、ジムが三日も山をうろついたことがおかしくて大声でわらいだし、わらいがとまらなくなつて、とうとう、その場にしゃがみこんでしまった。そのとき、いままで吹いていた風が、ちょっとのあいだとまった。ビルじいさんは、きゆうにわらうのをやめ、立ちあがって、道のほうを見た。じいさんは除雪車のうなりをきいたような気がしたのだった。しかし道には、ま冬のように白く雪があるだけで、うごくもののすがたはなにも見えなかつた。

ビルじいさんの顔は、ただしわがついていてというようなものではなかつた。まるで、もみくちやにした紙袋のように、くしゃくしゃのしわだらけだった。山のつよい日ざしと、かわいた風が、じいさんの顔をずっとまえにそんなふうにしてしまったのだった。いまでは、じいさんの顔には、かぞえきれないほど、しわがあつた。荒らっぽい山の気候のために目もいためつけられていた。白目の部分は赤くなり、むかしはかっ色だったひとみのまわりも、いまでは白くにこつていた。ただ黒いひとみだけが、色あせないで、雪をかぶったロッキーマウンテン脈を、澄んだあかるい目つきで見つめていた。声も長年のあいだにかれていた。しわがれた声になっていて、ときどき、ききとれないことがあつた。ビルじいさんは背が低かつた。一メートル六八センチぐらいだが、ずんぐりしたがんじょうなからだつきをしていた。だから、六十歳という年は、顔と手にでているだけだった。

じいさんは、しばらく道のほうを見つめていたが、除雪車はこなかった。そこでじいさんは、わったまきを持って、小屋へはいった。ドアの握りをまわしたとき、じいさんは、いそいで手をとめて、首をかしげた。それから、じいさんの顔に、うれしそうなほほえみがひろがった。じいさんはいま、凍っているコパー川の下で、さらさらと鳴る水の音を耳にしたのだった。長い冬のあとで、はじめてきく雪どけの川の流れの音だった。山の頂で雪がとけ、それが川へ流れこんで、氷の下を流れはじめたのだ。じいさんが耳をすましていると、雨水が山から流れだして、モミの木立の裏のほうで、山地の水といっしょになる音がきこえた。そして、しばらくすると、川をおしだしてきたはげしい水が、小屋のそばの、コパー川の氷をくだいてほとばしるように流れくだるさまが、じいさんの目にはつきりと、うつった。あんなに長いあいだ、こそりとも音をたてなかったコパー川が、ふたたび、小屋のそばで、にぎやかな春の歌をうたいはじめたのである。

そのとき、「ガ、ガ、ガ、チ、チ、チ、ビー」と、灰色と黒い羽におおわれた鳥が、モミの木から、大きな声で呼びかけた。ビルじいさんとともに、さびしい冬をすごしたカナダカケスが、長い尾をうちふりながら、丸太の山にとびおりた。

ビルじいさんは、かかえていたまきをストーブのそばの箱にどさっと投げこむと、朝食のとき、食べべのこしてあったパンケーキをとりあげた。そして、ドアからそのカケスのほうへパンケーキを投げてやった。カケスは、さっそくパンをくちばしでくわえあげると、遠くへ飛んでいて下へおき、ごちそう

を足でおさえた。それからパンを足でつかんだまま、モミの木立ちへもどり、そこで大きなやかましい声をたてながら、むさぼるようにごちそうを食べた。

ビルじいさんは、アペリー山のほうを見ながら、ゆっくりとドアをしめた。じいさんの幸運はその山にある。だから、じいさんは一日のうちに、なんどでもその山をながめるのだった。しかし、ビルじいさんは、その山を信じてはいなかった。山はいつ自分をうらぎり、じいさんを深い谷につきおとすかもしれないという気がした。それにビルじいさんは、死んだジムの亡霊が山にいて、自分がジムの秘密の鉱脈を見つけたら、山くずれを起こさせるにちがいないとも思っていた。

「ジムのやつは、きっと山くずれを起こさせるよ」

ビルじいさんは、まきをくべながら、ストーブにむかって、そう話しかけた。ストーブは古いものだが、真ちゅうのかざりはぴかぴか輝いていて、はじめて火を燃したときのようにりっぱにみえた。

「おまえはかわいいな。それによく燃える。」

ビルじいさんは、まるで人に話しかけるように、そういった。二、三分のうちに、ストーブにかけてあった湯わかしは、いきおいよく湯気を吹いて、ごとごといいだした。

冬になってビルじいさんの小屋にあなたがたか熱をもたしてくれるのは、そのストーブだけだった。小屋のすきまには布をつめ、六十年もまえの古い新聞を、のりではりつけてあった。おかげで、冬になって外の温度が零下七十度になるときでも、小屋のなかはあなたがたかくしておくことができた。

小屋のすみにはベッドがあつて、あたかそんな羽ぶとんが、こんもりとかけてあつた。ベッドの上にたながあり、そこには長ぐつがのせてあつた。テーブルにはすりきれた油布がかけてあり、そばにゆり、いすが一つと、食事用のいすとして、ダイナマイトのあき箱が二つおいてある。北がわの壁には鉱石をならべたたながあり、南がわの壁のたなには、食料が積みあげてあつた。低い屋根べやにつづいている階段室には、ひとり用のベッドがつくりつけてあつて、やはり羽ぶとんがかけてあつた。それはダグ少年が山へきたときに、使うベッドだった。

ビルじいさんは、ズボンのおしりをあたためようと、ストーブのほうへ背中をむけていたが、やがて、カケスが窓のところへきた音をきいた。カケスは、もっと食べ物をねだりにきたのだ。山に住んでいる人びとは、このカナダカケスのことを《ウイスキー・ジャック》とか、《キャンプどろぼう》とか呼んでいた。だからビルじいさんは、そうやって自分のところへあそびにくるカケスのことを《ウイスキーさん》と呼んでいた。ウイスキーさんのつれあいは、《ウイスキー夫人》と呼んだが、このほうは内気で、モミの木立ちからこちへは、飛んでこようとしなかった。

じいさんはパンの箱からトーストを一枚とって、ドアをあけた。つよい風が吹きつけて、じいさんの着ているものは、ぴたりからだにはりついたようになった。じいさんは、パンを雪のなかへ投げてやりながら、大声でいった。

「ほれよ、ウイスキー。こすからいキャンプどろぼうめ。はやくえさをさらっていけ。」